雨引山楽法寺所蔵《愛染明王像》について

末久真理子

はじめに

本稿は雨引観音(茨城県・雨引山楽法寺)が所蔵する愛染明王像(挿図1)についての調査報告書である。法量および画面の状態やその図様を中心に報告していく。なお、本稿においては、雨引山楽法寺所蔵愛染明王像を楽法寺本と呼称することにする。

一　調査資料の現状

作品名《愛染明王像》
作者　不明
制作年代　不明
所有者　宗教法人　雨引山楽法寺（通称　雨引観音）
材質形状　軸装　絹本著色
数量　一幅
法量　縦一六二・五㎝、横六九・五㎝

本図は(挿図2)掛幅に描かれたものであるが全体的に損傷が激しく、褪色、剥落、虫喰いなどが各所に認められ、保存状態は本図、表装部分とも良好とはいえない。本図部分においては、まず、中央部分を中心にして上下に多数の強い巻皺が見受けられる。大円光上部や図像中心部には巻皺が原因とみられる数箇所の剥落が見られた。また変色した茶褐色の黒ずみが、上部右に縦方向に、また上部左横方向に、下部にも三箇所にわたり横方向に細長い形状をもって付着している。その他にも本紙右下部に白い黴のようなしみや、全体に小さな茶しみなどが見られる。画面全体が茶褐色に変色して図様の詳細や彩色を確認することが困難な状態であるが、大円光および図像肢体の朱色や、五鈷鉤、五鈷鈴、獅子冠に施された金泥は比較的明快に確認できることから、当時の図様における質の高さが推測され、時を経ても丁寧な筆遣いであったことをうかがい知ることが出来る。

表装部分においては、裱褙の「行」体であり、いわゆる仏表装と言われる形態を示している。右の「柱」部分に水が流れたと思われるしみが上下全体的に見られる。「中廻し」の上部と下部、加えて「一文字」の上部と下部においても、巻皺の影響が強く出ていて、本紙が山折に浮いて剥れてしまい、裏が表出している。

風帯は右側において、虫喰いの部分が多く見受けられ、左風帯は上下に横方向の破れが存在する。「天」の上部右端には二センチほどの破れがあり、右の軸頭は欠損している。裏紙においては(挿図3)、左右の「柱」には上から下まで一本ずつ、左右の本紙端には上下にかけて少しずらして二本ずつの紙継ぎ、また本紙を均等に跨ぐように左右にかけて三本の紙継ぎで補修がなされている。なお、裏面の題箋には「愛染明王像」と記されている。

二　本図の特徴について

愛染明王は愛欲を菩提心に変える真言密教の仏であるが、その詳しい起源は不明瞭である。この明王はわが国で平安頃から脚光を浴び、以後鎌倉時代に全盛を極め、独自の展開をしていった仏である。(1)従って画像の遺品も鎌倉期以降のものが多く、特に鎌倉末期から室町時代にかけての遺品が多く現存していると言われていて、(2)関口雅之氏は「愛染明王像の画面形式はほぼ一定していて緒作例間の展開があまり著しいものではなかったので研究者の興味を惹かなかった(中略)」(3)と述べられ、愛染明王像に関する実証的な考察があまりなされていないことを指摘している。

図様特徴として、楽法寺本愛染明王像は宝蓮華座上に結跏趺坐で座し、一面三目六臂、忿怒の相で描かれている。この宝蓮華座の花弁一つ一つには宝珠が描かれている。頭上には獅子冠を載せ、冠上には五鈷鉤を飾っている。左右の六つの手はそれぞれ意味があり、第一手は息災を、第二手には敬愛を、第三手においては煩悩魔降伏の意味を表している。右上から不鮮明であるが恐らく蓮華を執り、そして矢を天に上げ、第一手には胸部にて五鈷杵を執る。左上第三手においては、根津美術館本や細見美術財団本、醍醐寺本に代表されるような息災法に用いられた日輪を掲げた図様、また、根津美術館本やＭＯＡ美術館本、総持寺本に代表されるような増益法に用いられる宝珠を持つ図様など特異な作例も見られるが、本図像では通常の形式で五指を握っている様相である。その下には弓、腹前にて五鈷鈴を執る。光背においては、頭光は円光で二重に表現されていておそらく五色の美しい彩色が施されているように見受けられる。挙身光は大円光でその中淵に唐草文様のような火焔が描かれている。宝瓶の側面は布で一巻きして端は自然な状態で床に垂らしてある。図像背景については、画面中心より下部に菱形の四方連続文様が配されている作例が多く見られるが、本図ではその様な背景は見受けられない。その背景下部に宝瓶を挟んで、宝珠や貝殻などの宝財が左右対称に配されて、そこには卍文様も描かれている。

以上のような様相はほぼ『瑜祇經』(4)に記述されるところに基づいていて、持物や乗座等について明確な規定を持ち、各時代を通じてほぼ変化なく踏襲されて来ているが、時代の降下とともに古様から新様とも称すべき様相が部分的に施されてきているのが認められる。(5)

ここで、六臂の図様について詳細を眺めてみると、まず、愛染明王像において最も異例の特徴が顕著に現れている部分が前述した左上第三手で、楽法寺本では日輪や宝珠は描かれていない通常の形式である拳を握っている構図である。そして右第二手を見ると本図では腕を外に突き出し、その手には矢を携え、その先を右上に掲げている。腕を垂直に上げて矢と弓を交差させる構図の、いわゆる天弓愛染明王図像のような、ごく僅かな異例(6)は別として、管見するかぎりでは二系統の構図が確認できた。(7)ひとつは楽法寺本で確認できた右第二の腕や矢を外に出した構図で、もう一方は腕を内に曲げ、矢を胸前に水平にして相対する弓の方向へ向けて、今にも弓を射るかのような構図である。楽法寺本と類似の系統における作例として、金剛三昧院本、長徳寺本、護国院本、棒沢寺本、岐阜・個人蔵本、大倉集古館本など鎌倉時代に制作された作例が挙げられる。この中から右第二手で握る矢尻の方向が楽法寺本と一致する作例は、護国院本、棒沢寺本、岐阜・個人蔵本、大倉集古館本(挿図4)、茨城・南円寺本(挿図5)が挙げられ、楽法寺本に描かれている光背の火焔が唐草文様のような形態で表現されている点、下部にか

けて傾斜が少ない重量感のある宝瓶の形態、台座の花弁に宝珠が施されている図様などは大倉集古館本と南円寺本において類似点が認められた。

以上のことから、楽法寺本と大倉集古館本および南円寺本とは、比較的類似した様相を持つ作例と見做すことができた。

三　おわりに

本稿では、雨引山楽法寺愛染明王像についての画面の状態やその図様を中心に論じてきた。楽法寺本をその他の作例と比較した検討の中で、左第三手で五指を握る点、宝瓶の位置は大円相を支えるように円相にやや接して描く点などを踏まえると、楽法寺本は通常の形式をとる図像といえる。しかし、右第二手においては二系統の様相が確認され、楽法寺本との類例を求めた結果、鎌倉時代末期に制作された大倉集古館本および茨城・南円寺本との共通要素が認められた。

南円寺は楽法寺と同じ茨城県内に位置し、また両寺は真言宗豊山派に所属するということが確認できた。今回の調査において両寺の直接的な関わりや、その背景までは考察することは出来なかったが、前述したように同じ県内に位置し、真言宗豊山派に所属していることから、両寺間の交流が想起され、何らかの図様の交換が行われていた可能性が推察される。これらの問題は今後の課題としたい。

註

(1)根立研介『日本の美術九　第三七六号　愛染明王像』(至文堂、一九七七)　金井紫雲編『東洋画題総覧』(国書刊行会、一九九七)

(2)「愛染明王図」『国華　第六四九号』(国華社、一九四六)

(3)関口正之「細見家所蔵愛染明王画像について」(『美術研究　二七三号』(美術研究所、一九七一、二〇九頁)

(4)「愛染明王図」『国華　第六百二十一号』(国華社、一九四二)

(5)「愛染明王図解」(『国華　第五三四号』国華社、一九三五)　上記の論考においても詳細が確認されているが、例えば平安時代の遺品などに描かれている宝瓶は鎌倉、室町時代のそれに比べてかなり小さく表現されていることなどが挙げられる。

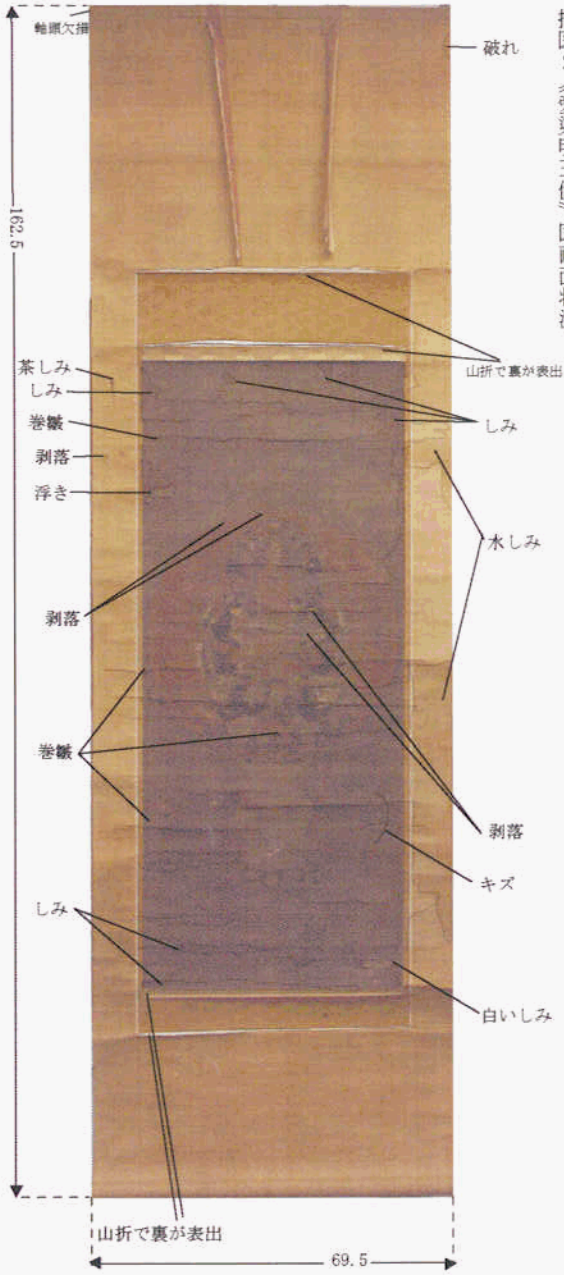
(6)金剛峯寺本、同じ楽法寺本である県指定文化財愛染明王画像などが挙げられる。

(7)前掲論文注4、二一二頁においては、二十三作例から右第二手における二系統が存在することを指摘している。同時に比率を調査し、二系統の差は無く、ほぼ同数を占めたと述べている。

参考文献

守屋正彦『日本美術図解事典』(東京美術・二〇〇四)

総本山長谷寺文化財等保存調査委員会『豊山長谷寺拾遺　第一輯　絵画』(元興寺文化財研究所編、総本山長谷寺文化財等保存調査委員会発行、一九九四)



挿図2《愛染明王像》図画面状況

挿図1《愛染明王像図》

挿図4《愛染明王像》大倉集古館所蔵

挿図3《愛染明王像》図裏

――― …裏に当てられた紙継ぎ

挿図5《愛染明王像》南円寺所蔵